

松戸市立病院だより

編集・発行:松戸市立病院広報委員会
〒271-8511 松戸市上本郷4005 番地 TEL047-363-2171(代表)
<http://www.city.matsudo.chiba.jp/hospital/>

ありがとう。



柏市在住 櫻庭 巧さんの作品

「理念」

すべての人から「ここに来てよかった」と思われる病院を目指します。

「基本方針」

1. 患者さんの権利を尊重し、安全かつ良質な医療ケアを提供します。
2. 小児医療、救命救急医療などを含めた急性期総合病院として、質の高い医療を提供します。
3. 地域の医療機関と連携し、地域完結型医療の中心的病院を目指します。
4. 職員が誇りと生きがいを持てる職場を作り、チーム医療を行います。
5. 臨床教育病院として医療人の育成に力を注ぎます。
6. 公立病院として自立した経営基盤を構築します。

「職業倫理」

1. 医療に携わることの尊厳と責任を自覚し、品位を保ち、良識ある職業人としての人格、教養を高めます。(向上)
2. 生涯学習の精神を保ち、医療の知識と技術の習得に努め、その進歩・発展に尽くします。(進歩)
3. 医療を受けるすべての人に対して、平等に接し、人格・プライバシーを尊重し、職務上の守秘義務を遵守します。(平等・尊重)
4. 互いに尊敬し合い、協力関係のもと医療に尽くします。(協力)
5. 医療の公共性を重んじ、法令やルールを遵守し、医療を通じて社会の発展に貢献します。(社会性)

当院は(財)日本医療機能評価機構の「認定医療機関病院」です

ナローバンドUVB療法

皮膚科部長
黒田 啓

ナローバンド UVB 療法は紫外線を用いた光線療法のひとつです。

以前より UVB (中波長紫外線) は皮膚疾患の治療に用いられてきました。ただ太陽光による日焼けの原因となる紫外線であるため、照射量が多くなると日焼けの症状が強くてしてしまうという欠点がありました。

そこで UVB のなかで日焼けを起こしやすい波長を除き、皮膚疾患に有効な波長だけに限定した光源 (ランプ) が開発されました。この光源を用いた治療機器がナローバンド UVB です。

外来通院でできる簡便な治療法として、現在光線療法の中心になりつつあります。松戸市立病院皮膚科では、外来診療室にナローバンド UVB を設置してあります。

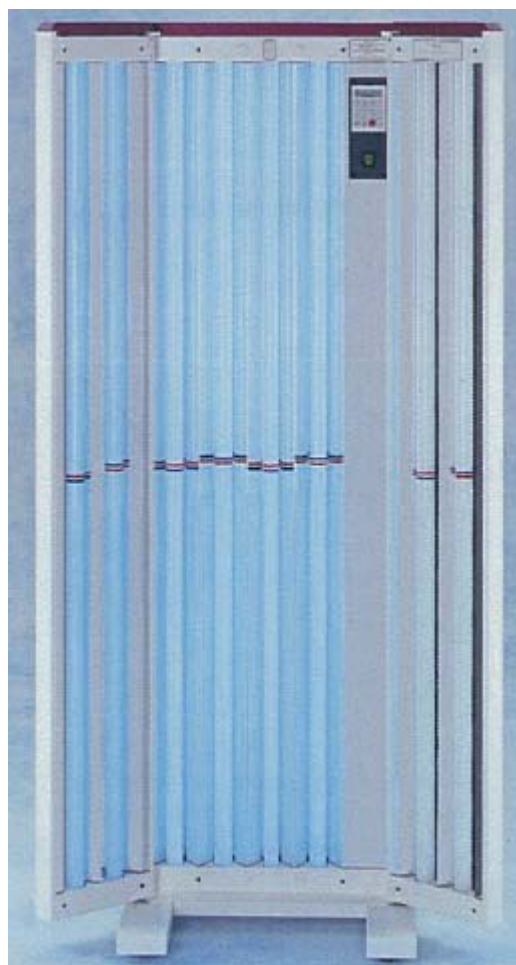
実際の診療は、最初に照射量を決める検査をします。そして少しずつ照射量を増やしていきます。1回の照射時間はせいぜい10分くらいまでです。週数回ずつ行いますが、通院の回数は患者さんの都合に合わせて相談して決めます。通常、1~2ヶ月で効果がでます。ナローバンド UVB でも照射量が多くなると日焼けのような赤みや痛みが出ることもあり、その際は照射量を慎重に調整する必要があります。内臓障害などの副作用はありません。

ナローバンド UVB 療法の効果が最も期待できる疾患として、尋常性乾癬があります。慢性に経過する疾患で、治療法には症状に応じていくつかの選択肢があります。軽症の方は、活性型ビタミンD

軟膏やステロイド外用剤を使います。症状の強い方には、光線療法やシクロスポリンで治療を行います。内臓障害が心配な方や通院がしやすい方は、ナローバンド UVB 療法の良い適応となります。また成人の治りにくいアトピー性皮膚炎、尋常性白斑、類乾癬、初期の菌状息肉症などの皮膚疾患でもナローバンド UVB 療法を行うことがあります。

治療法の選択は、皮膚症状の強さに加えて、患者さんの希望、通院のしやすさ、合併症など様々な点を勘案し、患者さんと相談しながら決めていきます。

(下：紫外線照射装置)



小児外科ってなんだ？

小児外科部長
照井 慶太

小児外科と聞いて、あまりなじみのない方も多いのではないのでしょうか。小児科がこどもの内科であるのに対して、小児外科はこどもの外科であるといえます。

小児外科では、生まれてすぐの赤ちゃんから、中学生ぐらいまでのお子さんの外科疾患を担当しております。

小児外科であつまっている病気は多岐にわたります。体の部位でいうと、腹・胸（心臓以外）・骨盤内・頸にまで及びます。

実際に小児外科がカバーする領域は、それぞれの病院によって異なりますが、当院では、成人領域でいうところの一般外科・消化器外科・呼吸器外科・泌尿器科を主に担当させていただいております。脳神経外科・心臓血管外科・整形外科に関しては、各診療科の医師が担当してお

ります。

病気の種類では新生児疾患・先天性疾患・腫瘍・外傷など、様々です。病気の名前を聞いてもすぐにピンとこない方も多いかと思います。そのため、小児外科を受診される方の多くは、直接来院されるわけではありません。はじめに小児科・新生児科などを受診された後、小児科・新生児科の先生からご紹介という形で、小児外科を受診されることが多くなっています。

とはいっても、おうちでほぼ診断できる病気もありますので、以下にご紹介させていただきます。少しでもおかしいなと感じたら、お近くの小児科までご相談ください。



『鼠経ヘルニア・陰嚢水腫』

おまたの付け根や陰嚢が腫れます。出たり引っ込んだりを繰り返す場合があります。年齢によっては自然治癒しにくいので手術が必要な場合があります。

『停留精巣・移動精巣』

陰嚢内に精巣（睾丸）がない、もしくは拳がりやすい状態です。不妊の原因になる場合があるので、治療を要する可能性があります。

『包茎』

おちんちんの皮が全くむけず、亀頭（おちんちんの先端）が出てこない状態です。感染を起こして赤く腫れたりする場合には、治療が必要となる場合があります。

『臍ヘルニア』

いわゆる「でべそ」です。自然治癒傾向も強いのですが圧迫療法により、より早く、よりきれいに治ると言われています。見た目の問題もありますが、気になる場合は2～3歳頃に手術を考慮します。

最新医療 (消化器内科) について

消化器内科兼内視鏡室長
齋藤 秀一

松戸市立病院消化器内科では2010年4月から7名体制となり、数ヶ月待ちであった上部消化管及び大腸内視鏡検査は現在1、2週間以内に検査できるようになりました。受診した当日でも医師が至急内視鏡検査をした方がよいと判断すれば検査が可能です。経鼻内視鏡検査も開始していますが、指定された外来からの予約が必要です。随時ドックの検査も受け入れておりドックからは直接経鼻内視鏡検査を予約で出来ます。

(下：上部消化管用ビデオスコープ)

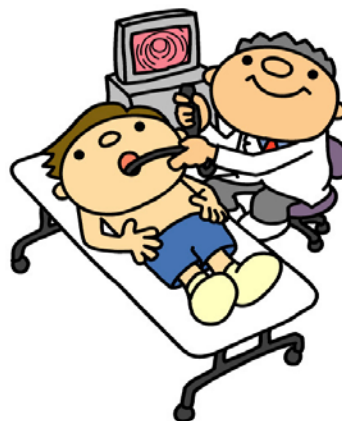


これらの内視鏡検査で発見されたポリープや早期癌は短期入院での内視鏡的切除術を積極的に行っています。さらに機器の充実も図り、早期胃癌の内視鏡的粘膜下層切開剥離術 (ESD) 前の範囲診断などに NBI (Narrow Band Imaging) や FICE (FUJI Intelligent Color Enhancement) 装置搭載の内視鏡光源を用いて、より精度の高い診断が可能となりました。

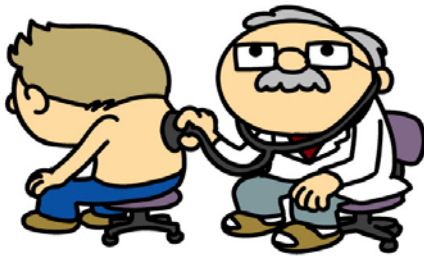
平日昼間は吐下血の患者さんを常時受け入れ止血処置をしており、夜間・休日は松戸・柏・流山の三市で構成されている吐下血待機ネットワークに参加して月に7日程度担当しています。



総胆管結石や胆道癌が疑われる閉塞性黄疸に対して ERCP (胆道や膵管を内視鏡・レントゲンを用いて行う検査) での診断はもちろんのこと、内視鏡的乳頭切開術 (EST)、内視鏡的経鼻胆道ドレナージ (ENBD) や内視鏡的胆道ドレナージ (ERBD) などの減黄処置を行います。胆管の結石は当科で可能な限り除去を行い、癌は手術適応があれば外科に紹介しています。



同様に食道や胃の静脈瘤治療に血管内、血管外硬化療法 (EIS) や結紮術 (EVL) を行っており、最近ではアルゴンガス (APC) で食道粘膜を焼灼して再発率を抑える方法も取り入れています。他科・他院から経口摂取困難な方に対して依頼があれば、経皮内視鏡的胃瘻造設術 (PEG) を行い早期退院や自宅療養するための補助的処置も行います。



内視鏡以外では肝細胞癌に対して腹部超音波装置を用いて体外から開腹せずにラジオ波焼灼が可能になり、従来から実施していたエタノール注入療法 (PEI) や血管造影での加療に加えて治療の選択肢も増えました。また前述の内視鏡的な処置が出来なかった閉塞性黄疸に対しても同様に腹部超音波装置を用いて体外から穿刺してドレナージチューブを留置することもできます。



(下：腹部超音波装置)



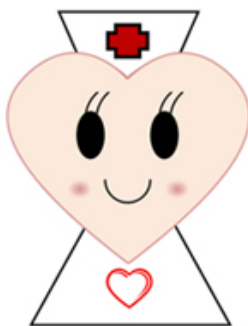
さらに最近治療が助成の対象になったB型やC型のウイルス性肝炎のインターフェロン治療なども適応があれば、新規導入や再治療も行っております。



以上のように治療も内視鏡・腹部超音波を用いたものからインターフェロン治療など薬剤を用いるものまで多岐にわたり可能で、診断も含め上記疾患以外にもより質の高い医療を提供できるようになりました。この冊子をご覧になった方はもちろん、周りの方々に消化器の病気で相談したい方がいましたら、是非当院の消化器内科へ受診なさってください。

看護の日を終えて

看護の日実行委員
山口 佐和子



左：市立病院看護
師発案によ
る、市立病院
「看護の日」イ
メージキャラ
クター「ハート
ちゃん」です。

5月12日はナイチンゲール生誕の日であり、看護の日として日本の記念日の一つにもなっています。

当院でも看護の日として毎年様々なイベントを行っています。今年で14回目となった看護の日イベントには、延べ208名の方々にお越し頂き、盛況に終える事が出来ました。



(上：看護の日に院内に展示された『看護川柳』の一部です。)

昨年に引き続き中央開催として、毎年恒例となっている『BLS(救急蘇生、AED)』と『アロマ足湯』に加え、今年から初の試みとなる『看護川柳』と『脳

トレーニング』の計4つのイベントを開催いたしました。



(上：『脳トレーニング』の様子です。)

「ハートを伝えよう」を病院テーマとして掲げ、看護の日のイメージキャラクターのハートちゃんを発案しました。

また、全員で取り組む意識を持ち、看護学生の協力も得ながら看護の日を迎えることが出来ました。

看護の日当日では、今年で20周年を迎える看護協会のテーマである「感動看護」を多くの人に伝えるため展示した『看護川柳』には、148名の方々からの投稿がありました。どれも非常に個性にあふれ、心に響く感動を与えるものばかりでした。看護川柳は職員、患者さんを問わず大変好評で、みな足を止めて眺めていました。



(上：毎年恒例の『BLS(救急蘇生・AED)』の様子です。乳児や幼児の人形を使用しています。)

『脳トレーニング』は脳年齢を簡単に診断する方法であり、短時間で行えて楽しいとこちらでも好評でした。

『BLS (救急蘇生、AED)』は毎年恒例となっており、興味をお持ちの方は実際にその場面に遭遇したときのためにと熱心に学んでいく方たちが多くいらっしゃいました。成人だけではなく、乳児や幼児の体験も好評でした。



(上：『アロマ足湯』です。昨年の看護の日イベントから始めたので、今回で2回目になります。)

『アロマ足湯』では、リラックス効果のあるオレングスイートを使用して香りも楽しめ、リラックスし尚且つ血行も良くなる効果があります。体験された方々からまたやってほしい、家でもやりたいとのお声を頂きました。



(上：記念講演の様子です。テーマは、「地域との繋がり方～ボーイスカウトを通じて～」です。)

そして看護の日を締めくくる最後には、中央手術室の長谷師長による「地域との繋がり方～ボーイスカウトを通じて～」という演目での記念講演が催されました。懐かしい写真、弾むトークで終始楽しい雰囲気でした。

最後になりましたが、皆様のご協力のもとに看護の日を無事に終えることができました。ありがとうございました。

来年も続く看護の日、どんなイベントが行われるのか、今から楽しみです。

看護の日イベント『看護川柳』で展示された作品の一部を紹介します。



看護師の
急なやさしさ
心配に



ありがとう
その一言に
元氣出る

「クリティカルパス」について

クリティカルパス委員会
委員長 時永耕太郎

「クリティカルパス」とは、ある病気の治療や検査について標準化された治療行程をスケジュール表にまとめたものです。「クリニカルパス」あるいは「クリニカルパスウェイ」とも呼ばれます。旅行に例えば、入院中に行われる手順を示した行程表といったところです。

従来は、各患者さん別に、または主治医別に入院の検査治療行程が計画されていました。患者さんにとっては自分がいったい何日目に検査を受け、何日目に点滴がはずれ、何日目に入浴ができるか、何日目に退院が出来るかの日程が示されていた方が治療に専念できます。

クリティカルパスには医療の標準化という目標があります。医療においても、病気や病態に対して標準的な対応というものが存在します。病気に対して科学的根拠に基づいた処置、治療を一定の質を保ちながら行うことは大変重要なことであり、そのためのツールとしてクリティカルパスを作成・運用する訳です。市立病院では、その病気の処置に関わる医療スタッフがチームを組んで、クリティカルパスの作成・運用を行っています。

完成したクリティカルパスをお渡しすることにより、患者さんは入院中のスケジュールを把握することが出来ます。患者さん・ご家族・医療スタッフは治療行程を共有しているため、安心感・一体感が生まれます。作成したクリティカルパスどおりの標準的なコースで、治療行程を終了する事を目標としていますが、必ずしもそうなるとは限りません。

クリティカルパスを作成し、標準化された治療行程を明確にすることにより、そこから外れてしまったものの存在が捉えやすくなる事も確かですが、予定どおりの治療行程を続けていても、退院という目標を達成出来ないという場合もあり得ます。ケースバイケースという言葉があるように、クリティカルパスには一方で個別化への対応という側面もあります。

クリティカルパスではそのことを「バリエーション」という言葉で表現しています。そういったバリエーションに対しては個別対応を行います。個別に現在の事態について、どのような対応を行っていくかについて患者さんに説明し、最終的に入院した目的を達成し退院して頂く事を目指しています。そのことにより、患者さんも医療スタッフも情報共有することで、納得のいく安心感のある治療ができるのです。

市立病院では、クリティカルパスを作成・運用していく中でバリエーションを集め、分析・見直しをしています。その過程の中で、安全且つ満足度の高い医療を継続的に提供していくことを目指し、日々努力しています。同時にクリティカルパスの作成・運用に関わる人間が変化・成長することにも取り組んでいきたいと思っています。

